

琉球史と地理学、考古学との接点

友寄英一郎

琉球史と地理学、考古学との接点という問題を、歴史とはどのようなものか、というところで問題にしながらお話ししてみたいと思います。

歴史は小を捨てて大雑把に捉えられなければならない、といいます。また歴史はキメ細かく検討されなければならない、ともいわれます。いずれも歴史とは何か、ということまで言い古されてきたことばであります。そしてこれは、一見全く対立した考え方で、互いに矛盾するかのようなことばです。そのことについてまず説明したいと思います。

世界史は部分史の総和ではありません。グローバルな流れで重要なもののみを拾っていくものです。人類全体にとって重要なことを記述するものであり、選択された史料を通じて、全体の潮流が明白なように叙述されなければなりません。つまり、1本の糸の変化具合を鮮明にする、ということです。そして全体史の潮流より全体史の構造が明確にされなければならない、といわれます。

また、世界史では実証的であるよりも総合的な視野を持つことがより重要であります。世界史においては、大を見て小を無視するような粗い態度が必要とされる、ともいわれます。

これまでに述べましたところで「世界史」ということばを「歴史」といいかえてもいいように思います。こういいますと、いよいよ「歴史はキメ細かく検討されなければならない」ということと矛盾、対立してくるように見えます。実は、歴史学というのは本来世界史的たるべきだと思います。そして、よりキメ細かく検討された実証的地域史や国家史あってはじめて総合的歴史が構想されると思います。

以上の逆の場合の理論も展開可能と思います。つまり、総合的な地域史や国家史を叙述する場合でさえ、その歴史を貫く論理、外部との関連性等が、時に局部的な実証性より重視されるべきであります。これはどういうことかといいますと、歴史というものは人類全体にとって重要なことを記述するわけであります。この選択された史料を通じて全体の潮流が明白になるように叙述されなければならない。全体史の潮流より全体史の構造が明確にされなければならないわけで、全体の潮流と構造を明らかにするために、史料を選択するといつてもさしつかえないわけであります。

世界史の場合には、グローバルな形で底を貫いている1本の共通するものを捉えることが重要であります。その際に小さいこと、細かいことは忘れていい、そこで大雑把につかむということばが出てきたわけでありまして、それはことば通り小さいものを捨ててしまうことではありません。



講演中の友寄英一郎先生

小さいことを捨いあげるがために、この全体を貫くものを忘れてはならない、ということあります。この全体を貫くものをとらえるには、どうしても細かいこと、世界史の場合だと各国史、あるいは地方史、といったものを忘れては全体を貫く糸は見出せないわけです。

このことは、もう少し狭くいって日本史、これも各国史のひとつですが、その日本史も実は小さいものから成り立っていくものであります、郷土史あるいは地域史、こういうふうなものから成り立っています。その際にも同じように、小さいものに気をとられて全体を貫くもの、共通するもの、あるいはその地域にとって重要なことを見失ってはいけないということです。さらにもっと小さくして、今度は沖縄の歴史を見てみると、沖縄ではまた小さく分轄できる区域があるわけです。沖縄の歴史を貫く重要な一本の糸、大事なこ、それを見落としてしまって、小さいことにこだわってその糸を見失ってはいけない、ということになります。

このような例は実は我々の周囲にもたくさんあります、次にも出てきますが、たとえば「易経」あるいは「陰陽」に関する事、日月だと山川、男女、吉凶だとかいうように、対立するものを持ってくることばがありますが、歴史においても予盾し、対立するように見える解釈もあるわけです。

沖縄の歴史研究は遅れている。これが本日の主要テーマであります。この場合、2つの意味合いを持っております。沖縄の歴史叙述の伝統のひとつに「易姓革命」というものがあります。これは『史記』にならってのものです。こうした歴史の思考方法とそれにもとづく叙述は、歴史叙述のうえから方法論的にきわめて初步的形態であり、批判されねばならないこととして、もちろん近年の歴史叙述には見られない古いタイプとなっています。

「易経」は「周易」ともいうようですが、易の名義には易簡、変易、不易の3つがあるようです。易簡とは知りがたく従いやすい簡易なこと、変易とは宇宙現象の変化をさし、不易とは変化のなかに不変の法があることをいいます。これは、もともと変化を予知しようとする占いから起きたものであります。易は未来を占うということで起ったもので、自然の法則に従うことを道と考える東洋の思想では、易の説明にも倫理思想が述べられています。經典には「五經」や「十三經」があります。易の原理は陰陽二元論で、天地、日月、山川、男女、吉凶などの反対現象を陰陽二元に分けて説明します。

中国の天子とは民を治めることを天から付託されたものであって、暴政によって民心が離反するような場合には、天は他の有徳者に命をくだして、かわってその人を天子とします。「天命を革める」というわけです。これはいずれも道徳的な考え方方が主になっておりまして、何かが国に起こって民衆が苦しむというようなことは、この統治者に徳がないからで、だから誰か徳のある人にかわらなければならない、というのがいわゆる「革命」です。天は他の有徳者に命を下し、その人がかわって天子になる、統治者となる。これが「命を革める」ということです。

中国の王朝には「姓」というものがありました。殷の国は「子」という姓で、周は「姬」という姓です。王統がかわるということは、この姓が変わるということです。沖縄には尚氏だと蔡氏だとありますから、沖縄でいえばさしづめ易氏革命というところでしようか。中国の王朝がかわるということに「易姓革命」という考え方が出てきたわけです。そういうことですので、したがって歴史叙述というのもそのような書き方になるわけです。何かよからぬことが起った、そして政変が起

こり、天子がかわるというパターンにもとづいて歴史が書かれているということで、『史記』にならっている考え方ですが、沖縄の歴史叙述でもそのようなパターン化がなされる。もちろんこういったことは最近の歴史学には見られない叙述方法ですが、その影響が残っていることは事実であります。現象的なことではありますが、沖縄の歴史研究が遅れている点として批判されるべきことがあります。

わたくしが特に強調したいのは次の2点であります。ひとつには琉球の自然の役割と意義であります。ここでいう琉球の自然とは、琉球の地理的位置をはじめとして、台風、干ばつ、飢饉、そしてその後に必ずといっていいぐらい流行した疫病、こういったことの原因となった自然的条件のことであります。1745年にできた『球陽』その他の資料によって1951年に琉球気象台で編集された『郷土気象災害資料』をみると、たいへん興味深いことがわかります。この資料は1639年から明治初期の1869年までの230年間のものをとり扱っているわけで、この間の災害の状況を見てみると、干ばつ、台風、豪雨などが20数回に及んでいます。そしてその隔年に必ずといっていいぐらい飢饉、そして疫病の流行があるというわけです。このほかに津波、大地震によっておこる大きな災害というのがあります。結局沖縄の人々は資料で見ますと、230年の間に数年毎にたいへん大きな災害をこなしてきたことがわかったのです。

例をあげますと、1709年の台風とそれに続いている飢饉のために、3,204人の死者が出ました。翌年も同じような災害で2,000人が餓死したことが記録されています。それから、1770年には例の明和の大津波が先島を襲い、1万数千人の人々を呑み込んでいます。翌年は大洪水、さらにその翌年は疫病の流行で多くの人々が死に、あるいは苦しんだということも記録に見えます。1774年はまれに見る厳寒となり、草木が枯死する。それから1776年の八重山の大飢饉では死者7千数百人に及んでいます。1825年には、台風でいためつけられた先島では、飢饉のために死者3千数百人を出しています。翌年も2千数百人が死ぬ、それで島の人たちは蘇鉄を各地に植えて飢饉にそなえたのが1832年でした。1832年といいますと、これから30年もすると、アメリカでは第2回目の本国イギリスとの戦いを経て完全に独立、そして国内における奴隸問題、といったものがそろそろ出てくるような時期です。リンカーンが奴隸を解放するのは1860年代のことです。

このような時期に島の祖先たちは蘇鉄を植えて飢饉にそなえた。いまから百數十年前のことであります。こうした記録はいくらでもあります。1850年の旱魃と1852年の暴風によって宮古では3千人の餓死者を出し、そのうえチフスが流行しました。翌1853年の八重山での悪疫の流行によって、千数百人の人々が死に、さらにその翌年には旱魃の影響で熱病が流行し、宮古で数百人が死ぬ。天災による損害は1609年の薩摩の侵入の際の戦死者をはるかに上回っている数です。薩摩の琉球への遠征軍3,000人中死者は300人で、琉球側の死者をその倍あるいは数倍と見積もっても、自然災害による死者の数にはとうてい及ばないということになり、この大自然の災害がいかに甚大であるか認識できると思います。17・8世紀あるいは19世紀でさえそうですから、古代琉球における大自然の脅威はいかばかりであったか、想像できようというものです。大自然の前には大波にもてあそばれる一片の木の葉にたとえられるのではないか、と思うわけです。

こういったことに目をつけた沖縄の気象学者は、この『球陽』から得た資料にもとづいて17世

紀は乾燥期、18世紀は湿潤期、19世紀は乾湿変動期というような気象区分を行っています。冬の最低低温期から変動周期を求めて、冬の低温期は1774年、1850年、1925年前後で、これから75年というひとつのサイクルを見つけました。同様にして、夏の旱魃の頻発期間に注目して、今度は夏の高温周期を求めてみたところ、1830年代、1950年代に高温や旱魃の著しいことから、旱魃、暴風、疫病、それにともなう飢饉のサイクルを120年とみたわけです。

この120年周期説にもとづいて琉球史を見たところ、1710年、1470年、1350年、1230年という年号がはじき出されたのであります。これらの年号を氣をつけてみると、義本王から英祖王への政変が1259年ではじめの1230年に近くなっています。それから西威から察度王への政変が1349年で、1350年に近い。また第一尚氏から第二尚氏にかわった年、すなわち尚徳王から尚円王にかわった年が1470年で、これはまさにその年であります。次の1590年といいますと、これは尚寧王の時代で、この時代には薩摩の侵政があります。1609年のことです。次の1710年、これは尚貞王代から尚益王にかわる時期であります。1709年には、台風、飢饉で3,000人、1710年には飢饉で2,000人の人が死にました。次の1830年がさきほどの蘇鉄を植えた時代—尚灝王の時代—であります。このサイクルはたいへん興味深いのであります。もちろんこの飢饉があったためにこの政変がおこったとは考えません。それが影響を与えた点はないか、ということです。これだけではありませんが、要するに沖縄の自然現象が、どのような影響を与えるものなのか、これからの歴史研究の課題といえましょう。

次に、考古学上の研究成果の沖縄歴史叙述への援用についてであります。最近、考古学的調査が進みまして、その成果が人々の歴史思考の中にとり入れられるようになりました。やがては歴史叙述にもとり入れられるようになるでしょう。考古学による新しい事実は沖縄の歴史に対して貢献することになるでしょう。そういう意味で、沖縄の歴史には書き換えられるところも出てきましょう。実をいいますと、歴史と考古学といっても、目的にちがいはないんでして、ある時点から歴史、それ以前は先史と呼ばれるわけです。歴史、先史という区別をするのは時々疑問に思うのでして、これをひとつにまとめるべきではないかと考えるのです。それはどういうことかといいますと、過去を復元する。再現する。それが我々の歴史であるわけです。文字ができる、それによって記録が残される、この記録によって我々の過去、我々の祖先の社会をふたたび描き出し、考えるというわけで、そういう意味では歴史と先史にかわりはないはずです。ただ、ここで方法が違うわけです。歴史は記録によって過去を復元するのですが、記録のないところの復元となりますと、人々の残した物によって再現することになります。みなさま、よく御存知の貝塚、遺跡から出た食料としての貝、使った土器類、その他のものによって、どのような生活をしていたか、どのような社会であったかを考えるわけです。移植ゴテや鍛などを使って土を掘りおこし、この時代に使われたものをとり出し、それによって復元する、という方法の違いは、どうしてもあるわけです。方法の違いによって一方は考古学、他方は歴史学ということになるわけです。目的では両者にちがいはないのです。

この考古学という学問は新しい学問であります。沖縄でも最近いろいろな成果があがっておりますし、除々に一般にも伝透しつつあります。たとえば、みなさんが一番関心のあるところでは、我々の祖先のもっとも古いところでは、いつ頃、どこから、どのような人間が沖縄にやってきたのか、ということがあります。考古学によりまして、いまからだいたい3万年前、あるいは1万8千

年前、という時期に沖縄に人がやって来た、というようなことがわかりました。ただ、実は、この人はどこからやってきたのか、ということについては今後の課題として残されているのです。3万年前といいますのは那覇の山下町の洞窟から出てきた人骨をカーボン測定法という絶対年代を測る方法でわかったのですが、今から $32,100 \pm 1,000$ 年という結果が出たわけです。具志頭村港川の碎石場の岩の割れ目（フィッシャー）からも人骨が出て、これもカーボン測定法で18,600年前という数字が出てきました。この頃は旧石器時代にあたります。旧石器時代にすでに沖縄には人が住んで生活していたことになります。旧石器時代の遺跡と思われるところは他にもありますので、調査が進めばこの時代の資料がもっと出てくる可能性はあるわけです。

土器を使うような時代になると、新石器時代と呼ばれます。去年（昭和50年）の末頃までは、沖縄における新石器時代の開始は今から4,000年ぐらい前とされていました。これは日本本土の縄文時代後期にあたります。しかし、去年の暮れ頃、新しい調査結果が出てきました。6,000年前あるいは7,000年前までさかのぼりうる。つまり日本本土の縄文時代前期の頃の資料が出来まして、いっきよに2,000年もさかのぼったわけです。しかし、今から6,000年前とはいっても、3万年あるいは1万8千年前とでは、相当の開きがあるわけで、今後の調査研究によってその間は埋めなければならぬことになります。今のところはこれをつなぐてだてはないわけです。1万8千年前の港川フィッシャーの人と、6千年前の人とは、どのようなつながりがあったかまだわかりません。

日本本土では縄文、弥生と続きますが、沖縄ではこの弥生文化の影響も受けておりまし、また弥生式土器そのものもたらされております。それが出土する、あるいはそれに似せてつくった土器も出てくるわけです。というわけで、相当のつながりがあったことが想像できます。それでは、沖縄の古い文化はどのようなものであったか、ということになります。日本本土の弥生文化の特徴というのは鉄や織物がもたらされる、あるいは稻がもたらされ稻作が始まるということですが、沖縄ではそのようなことを示す資料は今のところ出でていない、たとえばいつ頃から米がつくられたか、ということについての確固とした資料も今のところ出でていません。

日本本土とのズレはありますが、いつ頃、どのような文化があったかということは、考古学の成果によって考えられているわけで、こういったことは沖縄の歴史叙述にどんどんとり入れられつつあります。ただ新しい学問であり、新しい成果ですので、ときどき誤ったとり入れ方をされることもありますが、方法的なことに注意しつつ、沖縄の歴史の書き換えがなされなければならないと思います。

沖縄の歴史はもっとキメ細かに、なお多角的に研究されなければならないといいました。そして、これが叙述されるときにはその民族にとってもっとも大事なもの、歴史を貫くものを念頭に置いて書いていくことが必要です。ここで「キメ細かに」ということは具体的にどういうことかといいますと、たとえば琉球王統交替期における社会経済的視点について、あるいは農民を中心とした庶民の情況、動向とか、貿易の情況、それ等による影響などについて、ならびに近世沖縄の歴史における異国船の役割、意義などは、これまでの沖縄の歴史叙述にはほとんど反映されておりません。今後のきわめて重要な課題だと思います。そして、自然的条件（地理的環境）の役割、意義や考古学の成果等ももっと検討され、歴史叙述にもっと反映されるべきだと思います。

沖縄の歴史研究と歴史叙述において、地理学、考古学、社会学、心理学などの周辺諸社会科学の

成果を検討し、これをとり入れるようにしてもらいたい。たいへんなことではあります、 「キメ細かく」というとき、わたしはそういうことも念頭においていっているわけです。